

深化そして再生へ

リアリティーとアイデンティティーを求めて

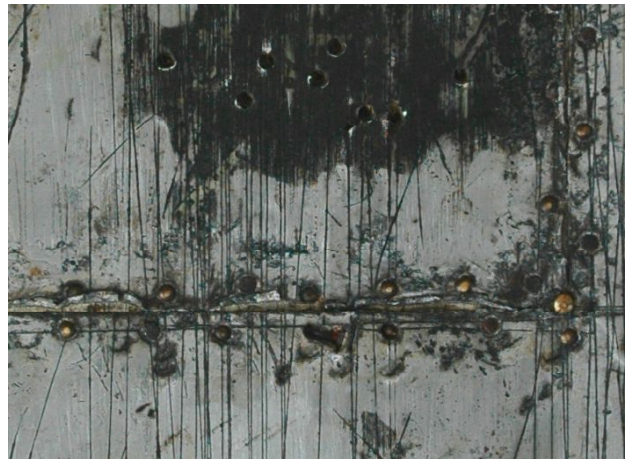
宮城 明

20数年ぶりにアナログのレコードが蘇った。私はそのレコードを聴きながらこの原稿を書いている。ことの発端は傷だらけで廃棄寸前の運命にあったあのレコードのカビや汚れを洗浄することから始まった。そして回転する黒い円盤の上でダイヤ針は見事な音を刻み青春を運んでくれた。傷もノイズもリアルに青春を語る。ビートルズ、ロバータフラック… etc. まろやかで豊潤、まるで泡盛のコースのように私を酔わせる。しかし曲の背景にベトナム戦争の暗い影が漂っていて物悲しい。さらに続々とアートブレーキー、コルトレーンが登場し音が炸裂、私の魂を激しく揺さぶる。これらのジャズの巨匠は、ポップアーティストのラウセンバーグ、ジャスパージョーンズと同様に多大な影響を私に与えた。いわゆる通過儀礼としてのモダニズムの洗礼を受けたのである。

今やすべてがデジタル化し、私たちの生活は特段に便利になった。しかしその反面個性を失い画一化した。しなやかで肌理こまやかな感性が育たなくなって来ている。

一昨年のある日、還暦をひかえ身近な物を整理する為に封印された段ボール箱を開けた。と同時にどうしようもない感情が落胆を伴って襲って来た。そこには色が黒染み、深く皺が刻まれ、埃を被った作品が光を失ってあった。数年前あれ程納得し、自信を得て発表したアルミ作品である。心の動揺は指先にも伝わり、震える手で埃を払いつつ見つめていた。この認識の落差は一体どこから来るのだろうか。自問自答した。答えは、作品も私自身も日々変化し続け5年の歳月を経てすべては元の状態ではないのだ。そして新しい気づきが加わり視点が変化していたのだ。封切られたあの瞬間に直観が働いたと言って良い。もう誰にも止

めることができない。私は決然と作品に手を加えることにした。徹底的に怒涛のようにハンマーで打ち続けた。次第に作品と自分との距離は消え一体となった。手も心もしびれた。視点は天と地を垂直に結びマイクロとマクロの世界だ。鉄が容赦なく天空から大地へと打ち込まれる。大地は地鳴りと共に裂け、マグマは景色を呑み込んだ。



「台風之夜」ミクストメディア（部分）

やがて漆黒の闇に閃光が走り世界は反転した。地表にはマグマが吹き出し新しい山脈が出現。断崖ができ溪谷ができた。

私は想像の翼に乗り、溪谷を急旋回し川をめざして下降を試みた。緊張から解放され飛行は自在となる。視界を遮っていた硝烟をくぐり抜けるとしばらくして長蛇のように横たわった発光体が見えた。溪谷を支配し君臨する巨大な存在だ。突如それは動き出し、瀑布に向かって上昇した。そして爆音で宙空は切り裂かれそこへ消えた。その後静寂と共に、大地を潤す大河が誕生した。こうして作品は甦った。私は今日もハンマーを打ち続けている。

現代美術の巨匠アントニオ・タピエス（スペイン）の言葉を紹介する。「椅子」につて次のように言及している。「その中に含まれている全宇宙を考えてみる。森の中で生命力が溢れていた木。材木を切った手と巧み

な技。椅子を買った人の喜び。それはどれ程の人の疲れを癒し、喜びや悲しみを見て来たか。(中略)古い椅子でさえその内部に昔の森の記憶を宿している。地面から昇ってきた樹液の力を今も秘めている。そして遂には薪となって人々を暖めることもできるのだ」と。彼は鋭い感性で宇宙の摂理と生命の鼓動を聴き、椅子を通して深く見ること力を説き、無限の可能性を私達に示唆している。みなぎる身体に五感を研ぎすまし対象を貫く視点がある。例えば、大地にそびえ立つ樹。その根を想え！白昼の天空。その群星を見よ！そして大海その中にサンゴやジュゴンを想像せよ！と論しているようだ。私は言いたい。薪になる前に役割を与えもう一度生命を吹き込みたい。それはアートの表現手段としての素材又は作品として自立するのだ。

私は過去、現在、未来と循環する時間の中で足元を見つめたいと願っている。新しい作品にチャレンジするよりも、立ち止まって過去の作品を検証したいと考えるようになった。見果てぬ夢が幻想と化しないための充電の時間が不可欠だ。20数年来の盟友上原誠勇氏も復活し再生した。画廊沖縄が甦った。その情熱に敬意を表し久しぶりの個展となった。

現実・・・オキナワの現実。

形状に沿って全体に網がかけられ瀕死にあえいでいる島。無垢と獣性が同居し絶対の力にほんろうされ理不尽にして不条理なシマ。

沖縄は果たして再生できるか！

住基ネット、有事立法、教育基本法改革、何んと憲法改正まで、すべてが無し崩し的に決定されるのか！V字型辺野古基地、県立現代美術館(仮称)しかりである。沖縄住民の魂(マブイ)は叫びとなって空中分解か！したたかで一筋縄ではいかないOKINAWA。

私の眼はどこに向っているのか。新しいビジョンを求めているが未だに象を結ばずにいる。それは普遍的で現代の相剋にも耐え得る哲学。源初的で深遠なる思想を欲している。しかもそれは集团的で無名性の中に存在し万人が共有できるものでなければならぬ。それはいずれにせよ私は海のように深く、大きな存在であると確信している。

(美術家/みやぎ あきら)

2006年12月8日 アトリエ於



宮城明作品「台風之夜」ミクストメディア

編集室より/この The GALLERY VOICE

紙は画廊沖縄が企画する展示会評論を中心に、多方面の論客に執筆をお願いしています。皆様の作品鑑賞の付録として、お役に立てば幸いです。また、日頃作家本人から訊くチャンスが少ない制作コンセプトや制作現場の話など、本人のことで語って頂くのも、このGV紙の大きな役割です。

*時々 はく画廊主のひとりごと>や美術ファンの皆様の寄稿、投稿も掲載したいと思います。どうぞ気軽に原稿をお寄せ下さい。(但し、メール se-u@tontonme.ne.jp でおねがいします)

*次回予告 /期待の若手の美術家、上間彩花さんの個展を予定しています。どうぞご期待下さい。(U)

根源的な問い

高良 勉

宮城明個展に対しては、いつも一種の緊張感と期待感に襲われる。何故だろう。私は、1987年に画廊沖縄で開かれた「ウェイブキャンパス」展以来、20年近く宮城の作品を見てきたのだが、この緊張と期待感は変わらない。

今回の、「深化そして再生へ」展も、準備過程から見させてもらった。砂糖キビ畑に囲まれた画廊沖縄（南風原町）の二階ギャラリーに入ると、まず「すごい空間になった」という言葉が浮かんだ。

そこには、ベニヤ板大に薄いアルミ板を張り付けて造形された作品が立体的に展示されている。その、アルミ板素材はオフセット印刷で使用された製版の廃品である。作品群は、「腐食」や「マグマ」シリーズとして展開されたが、さらに立体的に「深化」させられている。

宮城は、印刷文字の痕跡が残るアルミ板を、切り裂き、破り、叩き、ホッチキス型の針や釘を打ち込み廃材の木版に張り付ける。さらにその上に赤い鋸を打ち、ネジで止めていく。アルミ板には青いインクの跡が、廃材の木版には赤いペンキなどが見えるが、色彩は圧倒的にくすんだアルミ金属色だ。さらに、褐色の薬品もかけられてある。

このようなミクストメディアの作品から、鑑賞者は様々なイメージを受け取ることができる。私は、まず作者の歴史や時代状況に対する怒りや、悲しみ、抵抗を感受することができた。アルミに切り裂かれ、スッテプル針が打たれ、めくれた傷口は、作者の受苦した傷口も連想させる。「腐食」シリーズのときには、その傷口がただれたりケロイドになっていくイメージが湧いてきた。

すると、これらの抽象作品が喚起するイメージは、宮城の戦中、戦後体験が無意識層まで揺さぶられて表現されているのではないか。宮城もまた、母の胎内で終戦を迎え、敗戦後の貧しい沖縄で60年余生を抜いてきた。

それ故、彼は徹底して素材にこだわっている。造形の素材として、廃品、廃材を優先的に選択している。アルミの廃材、木板の廃材、懐中電灯の廃品、「禄」という廃文字等々である。これは、宮城の単なる好みや思いつきではなく、強い表現思想の表れである。

実際彼は、「現代美術の巨匠アントニオ・タピエス（スペイン）の言葉を紹介」し、

その影響を文章化している。そして、廃材たちを「薪になる前に役割を与えもう一度生命を吹き込みたい。それはアートの表現手段としての素材又は作品として自立するのだ」と述べている。そこから、物の概念は「深化」され「再生」への祈りが始まるのだ。

宮城によって、新たな生命を吹き込まれた廃材たちは、新しい物質となってアートの中で交響し合う。この、作家—素材—時代状況—宇宙観—鑑賞者の相互関係性の中に作品のイメージとメッセージを成立させる方法意識は、宮城なりのモダニズム／ポストモダニズムの限界を突破していく方向性と言えらる



2007年1月・宮城明展（画廊沖縄）

最新の小作品群である「夜明け前」、「断裂」、「ジュゴンの涙」、「飛翔」等を見ていると、その新しい展開が始まっていることを感受することができる。かつてのアルミ板の表面が、スープ状のカオスの海に変容し、切り傷から大河が、シワから山脈のイメージが生まれつつある。そして宮城は、ハンマーを打ち続けている。ほとんど無意識に。新しい宇宙が誕生するのだ。

このように、宮城明の個展は何故、何を、どのように表現するのかという芸術の根源的な問いを投げかけてくる。彼は、タピエスがカタロニアの風土と文化的政治的情况を忘れなかったように、琉球弧のそれらにこだわる。そこから新しい表現が生まれるときの緊張感がビリビリと伝わってくる。そのイメージとビジョンはジャンルを越えて影響を与えるのだ。

（詩人／たから べん）

格闘と悟りの哲学

大城和喜

格闘する自我

素人の僕は筆で色を描くのが、絵だとずっと思ってきた。しかし、筆を持たない作家がいることを改めて確認させられた。宮城明も確かにその一人だ。切る・打つ・叩く・剥ぐ・焼く・引っ張る・繋ぐ・・・事で作品を作る。ペンチでアルミ板を切り、ネジやホッチキスで留め、ハンマーで思い切り叩き、ペンチで引き裂き、バーナーで焼き・また切り裂き・叩き・・・制作現場を目撃したわけではないが、まさに素材と作家との壮絶な格闘技のようだ。

きれいとか美しいとかの次元ではない。技巧の問題でもない。ただひたすら、悲しみ・怒り・破壊・抵抗・主張・・・体の底から湧き出る魂の叫びのようだ。一点の妥協も許さない。それ故に見るものを圧倒し強い衝撃波を与える。絵の前に立つと、小市民的にのほほんと生きる僕を照射し、僕は居場所を奪われる。

主張のはっきりしたベートーベンの力強さではない。人間の喜怒哀楽が深化し苦悩するブラームスの重厚さ・・・でもない。これは一体！何なんだ！。

告発の対象

絵の具が作られた人工の色に対して、叩いて焼いて剥ぐ行為でできる作品は、素材が自然に醸し出す世界なのだ。叩く焼く剥ぐ・・・絶えきれない悲痛の声だ。ネジや釘を頭にハンマーで打ち込まれる激痛の叫びのようだ。

きっと、宮城の作品は格闘しながら、瞬間瞬間の出たところ勝負で仕上がるに違いない。まさにそれは、まだ見ぬものの誕生であり、宮城明の血の通う分身なのだ。あらかじめ用意した完成予想図や設計図に、導かれる作品ではない事は明白だ。

それにしても、宮城明は、一体何と格闘し何を告発しているのだろうか。何に怒り傷つき踏ん張っているのだろうか。そして、どんなメッセージを伝えたいのだろうか。あくせくする日常、分裂状況の沖縄、右傾化する日本の政治状況、はたまた、世界の貧困・差別・戦争、泣き続ける地球の叫び、そして、状況へ無関心な人々・・・。

それらを鋭く告発し乗り越えんとする、力強い意志にも見える血のような朱色。虐殺された死体の額に、一つ目小僧のような妖怪のような、

懐中電灯の目が鋭く見る者を凝視し今を問いかける。

不惑の悟り

人は誰でも、諸々の状況と格闘し苦悩しながら生きている。格闘の後にはやはり休息が必要なのだ。次の格闘のためにも汗をふかなければならない。休息は無用の用なのだ。

宮城明には、叩かれ引き裂かれた激しい世界がある一方で、茅葺きの家のハシル（戸）を連想させるような癒される、落ち着いた世界もある事に気づく。それは、無駄な部分が削り取られた、余りも不足もない、一切の感情も主張もない、日常を超越した「詫び寂び」の、無私の悟りの境地のようだ。茅葺き家のハシルには、人を包み込む懐かしさがある。



宮城明作品「マグマ」ミクストメディア（部分）

それはまた、長い歴史の中で万人に踏みしめられ、磨きに磨かれた黄銅色の石畳のようにも見える。地味ではあるが深みの中に気品ある黄銅色の石畳には、人間の女々しい喜怒哀楽を超え、ただ全てが許されるあらゆる苦悩を超越した世界がある。否定しても否定しきれない、全てを超えたハ長調の肯定。それは、ひょっとしたら人が、最後に辿り着く境地を予言し暗示しているようだ。まるで、壮大で無垢で敬虔な神の境地に辿り着いた、ブルックナーの交響曲のようだ。

溢れ出す感情を大胆に表現し、魂を揺さぶる程の激しい叫びと、一方で感情を押し殺し、踏みしめられた石畳のような、深みのある静寂さの両方併せ持つ、宮城明の格闘と悟りの哲学の前で僕は立ち往生している。

（南風原文化センター館長／おおしろ かずき）

AKIRA MIYAGI



〈宮城明氏・2006.12〉

〈宮城明について〉

人間があらゆる困難な厳しい状況に陥った時、最後に残された人々の「意志」の表現手段は「美術表現」と常々思っていた。先日、名古屋から来た画廊主は、美術は「霊長類最高の知的遊戯の欲望」と返した。もともとである。地上の多くの民族の文化や言語、宗教の壁を超えて現代の美術表現は、人間の自由の「声」として、その有効性を可能にしている。だとしたら、美術表現は地域社会が言語や文字表現を失う状況にあっても、最も重要な知的表現の最後の「砦」かも知れない。今回の宮城明作品に接して、改めて美術行為の大切さを感じ入ったものである。

さて、宮城明の表現手段は絵画の領域にありつつも、その手法、支持媒体において、独創的で自由である。一般的に美術表現は視覚芸術のみに置き換えられがちだが、宮城は従来の平面キャンバスからの離脱に成功した。キャンバスの土台である木枠そのものを変形させた作品ボディシリーズ、後のアルミシリーズに至っては素材の特質を活かし、触覚や嗅覚を刺激する作品に到達している。

1987年には自信作「波形キャンバス」を生み出し、その後、水を得た魚のように、平面と立体の間でリアリティーに富んだ秀逸な作品を制作し続けた。

1989年8月宮城は自信作の「波形キャンバス」のシリーズをニューヨークの有名な現代美術画廊、OKハリス画廊とレオ・カステリ画廊に売り込みのため渡米した。残念なことにバカンスのため休廊中でいったん帰国する。しかし知人に預けたスライドの

フォトフォリオ作品がOKハリス画廊主アイヴィン・カープの目に止まり、沖縄に居た宮城にNYの友人からコールが掛かる。同年11月27日200号の大型作品をコンテナに積んで再渡米した。宮城は20代半ばNYに3年間留学している、憧れの画廊からのオファーに心を熱くしたに違いない。しばらくマンハッタンのソーホー画廊街では、日本からやってきた美術家MIYAGIは話題になったようである。ラウシェンシェンバーグの個展のため、ヨーロッパ出発直前だったNY画廊界の帝王レオ・カステリも宮城の作品に関心を示した。レオの帰欧後レオのパーティーに招待された宮城だったが、時間が取れず参加出来なかった。米国(NY)で制作活動するには、かなり厳しい壁があったようで、個展ならずに帰国した。

帰国後はさまざまな素材とテーマと格闘、1991年には戦後のアメリカンイズムを揶揄したジーンズシリーズ「アイデンティティー」を発表する。さらに、2000年には素材を薄いアルミ板に変えて「表皮一体」のアルミシリーズで沖縄人の「矛盾」したメンタリティーを鋭く告発した作品を発表した。以後、戦後のオキナワ沖繩の歴史の痕跡を記すように「オキナワ」という「場」の問題を強烈に示した作品を打ち出していく。

今展の「深化そして再生へ」の大作群は展示空間に足を踏み込んだ瞬間から観者に呼びかける。痛々しく刻印された場の歴史、亀裂と縫合、弾痕と修復、加害と被害、犯罪者と共犯者、弱者と支配者、マイノリティーとマジョリティー、米軍基地、自衛隊基地、苦渋の選択という欺瞞・・・この宮城のアルミシリーズ作品は戦後の沖縄が歩んだ足跡そのものと言えよう。言い換えれば、現在の沖縄人の叫びでもあり、作品の背後から思考する肉体から搾り取られた最後の「声」が聞こえるようだ。この新抽象表現主義の形態で表現された強烈な作品群は宮城氏が1945年の10月生まれであり、母胎で戦争の爆音を体験したことも決して無縁ではないでだろう。戦後60年が過ぎた現在、胎児期に五感が体験した記憶として、精神の奥深く刻まれ身体の生理的恐怖の具体として、作品が重なる。さらに不幸と言うべきか、宮城が戦後社会に産み出て還暦の人生を過ぎた今、沖縄社会を取り巻く環境はますます悪化し、精神のストレスは増すばかりである。この一連の大作群は、宮城の日常的精神の営みの証とも言えるし、逃げ場のない問題を抱え込み、深淵なる「マグマ」として作品が提示されている。今展の大作シリーズは現在の沖縄社会への悲痛の叫びであり、外に向けては「voice of okinawa」と言える。

(画廊沖縄代表/上原誠勇)